肉牛における低コスト生産のポイント

愛媛県畜産研究センター

繁殖経営

①自給粗飼料の活用

自給飼料（ソルガム、イタリアン、飼料イネ、稲わら等）の増産、積極的利用により粗飼料費の節減を図る。

②繁殖管理の見直しによる分娩間隔の短縮

分娩前の増飼、分娩後の衛生管理及び発情発見等、繁殖管理の見直しにより分娩間隔を短縮し繁殖雌牛１頭当たりの収益を上げる。

③繁殖雌牛の更新

受精卵移植技術、ゲノム育種価評価等を活用し、優良後継牛の確保を図り、産子の市場価値の向上を図る。

肥育経営

①一部一貫経営による肥育素牛費の削減

肥育経営において、素牛費は非常に大きな割合を占める。一部一貫経営を導入することで肥育素牛費の削減を図ることが可能。

②事故率の低減

牛の健康状態、牛房内敷料の状態に留意し、また ICT 技術の活用などを併用して牛の事故率低減を図る。特に出荷前の転倒事故には注意する。

③肥育前期の増体量に応じた肥育期間の調整

肥育前期（10 ヶ月齢～13 ヶ月齢）の１日増体量（去勢 1.0kg、雌 0.8kg）に応じ肥育牛を増体型、資質型にグループ分けし、飼料給与量、出荷時期を調整することで枝肉成績の向上、牛舎回転の向上を図ることができる。

肉牛における飼料費節減対策のポイント

愛媛県畜産研究センター

①飼料ロス（残飼料）の低減

各牛舎の飼料給与量を精査し、飼料ロスの低減を図る。また、肥育牛舎を除く各牛舎の残飼料を有効活用し、飼料の廃棄を最低限に抑える。

②肥育牛出荷月齢の遵守及び短縮

肥育牛は、１日当たりの飼料コストが高く、また残飼料を他牛舎で活用することは困難。出荷月齢（去勢２５ヶ月齢未満、雌２７ヶ月齢未満）を遵守し、また発育性に優れたものは若干前倒しで出荷することで飼料費を節減する。

③繋養頭数の適正化

繁殖雌牛の繋養頭数を見直し、供卵牛として活用できない雌牛は計画的に淘汰する。また、産子も子牛、育成牛の段階で必要最低限を残し売却処分し、飼料費節減を図る。
そのためには、子牛、育成牛の飼養管理技術の向上が重要になる。

④自給飼料の活用

繁殖和牛農家において、繁殖雌牛（成牛）は自給飼料多給による飼養管理が基本。

現在、当センターでは購入飼料中心の飼養管理体系だが、将来的には飼料イネ、稲わら等を利用した TMR 等、自給飼料を活用した飼養管理体系に修正する必要がある。